

《修士論文要旨》

中山間地域におけるジオ・ツーリズムの可能性

澤 義 明*

地場産業の不況や人口の過疎化など、多くの課題を抱える中山間地域の自治体では、経済的効果、コミュニティーの維持、地元への誇りの回復などの地域活性化策として観光が注目されている。そこでは、以前から行なわれてきた大規模な観光開発による環境への負荷の大きさと経済的問題とから、持続性ある観光としてさまざまな形態のエコツーリズムが提唱、実行されてきた。2007年にはエコツーリズム推進法が成立し、さらに世界遺産やジオパークなどへの登録といった国際的な取り組みも行なわれ、その環境は全国的に整いつつある。しかし、現状では結果として特別な観光地がブランド化され、観光対象に恵まれない地域への浸透は今後の課題と考えられる。たとえば、ジオパークではこれまで見落とされがちであった大地に観光対象としてのスポットを当て、新しい観光価値と観光地とを見出したが、その観光価値はジオパーク内にとどまらず地球規模にまで広がる。普遍的な中山間地域での小さな観光価値がジオパークの価値を高めることにもつながる。

一方、自然が豊かな地域での事例が増えるにしたがい、小泉(2011)¹⁾ほかが指摘するように、エコツーリズムは自然を対象とするという誤解がみられる。ジオパークがエコツーリズムを実践する1つの形態であるとしたとき、この問題は重要であろう。河野(2011)²⁾が提唱する「Geo as Eco」の概念を発展させるためには、ジオの定義に人文的な要素を加えた本来のエコロジーの意味を普及する必要がある。そこで本論では、エコツーリズムの本来の概念であるエコロジーの意味を再検討する意味で、自然、歴史、文化、民俗、景観などを総合的に捉える地誌の視角からジオグラフィカル・ツーリズムの略称としてのジオツーリズムの可能性について考察した。

本論では、観光地域の自然、歴史、文化、民族、景観からなる有機的につながった空間と、観光地のほかに、観光地と隣接する地域の空間と、観光者が持つ空間との3つの空間を想定し、その「かわり」に焦点をあてた。その上で、非日常性の体験を強調した観光だけではなく、日常的なかわりに価値を求めた観光の可能性を考察した。

観光の空間には、実際の観光行動の範囲を示す空間と、「観光のまなざし」が及ぶ範囲を示す空間との2つが考えられる。また、観光のまなざしには、観光者と観光地と観光事業者からの3つのベクトルが考えられる。そして、すべてのベクトルが向かうのは観光価値(具体的には価値を認める対象)である。議論はあるが、J.アーリ³⁾の「非日常性」を観光の価値とすれば、観光者は日常では体験できない特別な観光地に向かうことになり、普遍的な地域は価値のないものとして見過ごされる可能性が高まる。一方、ジオツーリズムでは、特別な非日常的な対象に観光価値を求めるのではなく、これまで見過ごされてきたありふれた観光対象と、観光者や離れた

地域との関係に観光価値を求める。また、社会の発展とともに観光の空間は拡大し、現在は実体空間をとまわらない仮想空間での観光が生じている。ジオツーリズムは、拡大した空間を小さな環と大きな輪とで異なる空間価値を見つけ、有機的・生態的な観光を具体化することが目的である。

研究対象は奈良県川上村での観光を取り上げた。川上村の観光計画では、村を北側から「出合いのゾーン」「賑わいのゾーン」「歴史のゾーン」「自然とのふれあいのゾーン」の4つに区分し、各ゾーンごとに観光拠点が設定されている。これは、京阪神側から来村する観光客の動線に沿って観光客を受け入れ、進むにつれて村の歴史と自然を楽しむように導く平面的なゾーニングといえよう。一方、ジオツーリズムでは、小さなサテライト的な「場」を多く設定することが有効と考えられる。「場」とは観光地と観光者、観光地と他の離れた地域との「かかわり」を体感できる空間であり、山間地域では高距と広がりを感じられる峠が「場」の地点を示す「場所」の1例となる。そして、その価値を観光者に告知し学習できる観光拠点は1ヶ所に集約することが必要になる。川上村では、村ごとミュージアムとしての「森と水の源流館」がこの役割を担うことになる。ネットワークの拡大と、より広域で有機的な活動の可能性についても検討した。

- 1) 小泉武榮 (2011) 「ジオツーリズムの提唱とジオパークによる地域振興・人材育成」：『地学雑誌』120 (5)、pp.761-774
- 2) 河本大地 (2011) 「ジオツーリズムと地理学発「地域多様性」概念」：『地学雑誌』120 (5)、pp.775-785
- 3) アーリ・J、加太宏邦訳 (2002) 『観光のまなざし…現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、289P